

日本大学桜門建築会

2008-December

No.83

桜建会報



U41@NU展の会場風景



<http://www.okenkai.jp/>

contents

特集/U41@NU展 桜門建築の新世代——2

研究室紹介/ウォーターフロントデザイン研究室

広田研究室 建築音響研究室——12

事務局だより——14

学部ニュース——15

特集 U41@NU展

桜門建築の新世代

2008年6月17日(火)～28日(土)の期間、桜門建築会の主催により、駿河台校舎1号館CSTギャラリーで「U41@NU 40歳以下の日大出身建築家展」が開催された。

今号では特集として取り上げ、出展建築家の鍋島千恵氏、黒川泰孝氏、馬場兼伸氏、多田脩二氏、関本竜太氏、松崎正寿氏、大野博史氏、仲條雪氏、木内厚子氏、福田創氏、國武陽一郎氏、齋藤由和氏、山中新太郎氏の出品作品の一部と、インタビューから抜粋したコメントをまとめて掲載した。コメントは、各出展者の意図を表すにはスペースが十分ではないが、建築への思いの一端を示すものとして、理解の助けとしていただきたい。(インタビュー全文は、URL <http://tkmy.net/u41/>に掲載)

展覧会期間中に行われたシンポジウムについては、司会を務めた田所辰之助准教授より当日の議論を総括する原稿を寄せていただいた。さらに出展建築家より木内氏、齋藤氏、山中氏、企画側より畔柳昭雄教授、広田直行准教授、大川三雄教授から、展覧会の意義や評価などのコメントをいただいた。また展覧会の目的や建築家選出基準などは、以下の主催者あいさつから引用した。

若手の活躍を学内外にアピールすることが、桜門建築会のこれからの大きな使命であると考えている。今後も同様な企画を引き続き行えるよう、皆さまのご支援をお願いするものである。

(佐藤慎也/広報委員・理工学部建築学科助教)



主催者あいさつ

日本大学の4つの学部には、それぞれ特徴をもった5つの建築系学科があり、多くの卒業生を輩出しています。もちろん、その中には、建築家や構造デザイナーとして活躍している卒業生たちが数多くおります。

日本大学建築系学科卒業生のOB会である日本大学桜門建築会では、このような卒業生たちに焦点を当てた展覧会を企画いたしました。しかも、すでに名声を得ている有名建築家たちではなく、これからのさらなる活躍が期待されている40歳以下(Under41)の建築家たち12組13人に注目しています。彼らの代表作を写真や図面、模型などによって紹介する本展覧会は、学外の方々に対して、日大卒業生たちの活躍を紹介するものです。それとともに、学内の方々に対しては、多くの諸先輩たちが後輩たちの活動を知る機会となり、現役の学生たちが自分の先輩たちの作品を目の当たりにする絶好の機会となるでしょう。

今回の出展建築家である12組13人の選出については、1968年1月1日以降に生まれた日本大学出身者の中から、

主要建築雑誌である「建築文化」「GA JAPAN」「新建築」「新建築住宅特集」に個人名、または主宰事務所名で竣工作品を発表した者、もしくは建築設計に関する重要な賞の受賞者という基準を設けました。他にも主要な建築雑誌がありますし、作品を雑誌に掲載しない建築家もおりますので、これはあくまでもある基準でしかありません。しかし、今回紹介する建築家たちの作品を通して、少しでも多くの方々に、日大卒業生の活躍の一端をご覧いただけることを期待しております。

本展覧会の開催に際し、展示模型、展示パネル用の図面・写真データの提供などで全面的なご協力をいただきました出展者である建築家の皆さん、その主宰事務所のスタッフの皆さん、企画にご協力いただいた理工学部建築学科大川三雄教授、短期大学部建設学科田所辰之助准教授、理工学部建築学科佐藤慎也助教と展示構成デザイン、展示パネル制作を行った佐藤研究室の皆さん、その他、ご協力をいただきました関係者各位に厚くお礼申し上げます。

シンポジウム所感

ことばの「温度」

田所辰之助(短期大学部建設学科准教授)

U41@NU展にともない、2008年6月26日(木)に駿河台校舎1号館CSTホールでシンポジウムが開催された。出展した建築家の中から、鍋島千恵(TNA)、馬場兼伸(メジロスタジオ)、山中新太郎(日本大学)の三氏が登壇し、それぞれの設計活動について各20分ほど解説した後、ディスカッションに移った。司会を務めさせていただいた立場から、当シンポジウムで交わされた議論について、感想なども交えながら報告したい。

おだやかな匿名性へ

シンポジウムに先立ち展覧会を見て回ったが、出展されている作品それぞれのデザインの違いを越えて、ある共通する特徴があるように見受けられた。大げさな身振りでデザインの強度をふりかざすのではなく、個々の設計条件を巧みに読み解きながら、おだやかな匿名性に収斂していくかのような柔らかな建築。それは、「40歳以下の日大出身建築家」というフレームを越えて、現在の若手建築家たちが共有するデザインの特徴でもあるように思われる。シンポジウムでは、三氏の建築観だけではなく、こうした時代状況に対する認識についても引き出せるとおもしろい、と思った。

口火を切った鍋島さんは、「沈下橋」のスライドで話を始めたのが印象的だった。川が増水すれば水の中に沈み、減水するとまた姿を現す。自然の猛威に逆らうことなく、岸と岸を結びつけた引き離す「ジョイント」としての存在が、彼

女の建築の原風景にあるという。代表作「輪の家」はきわめて美しいプロジェクトだが、軽井沢の森の中で、ストライプ状の開口部で周囲の樹木と関係を結ぶ。その独特の造形は、建築が「ジョイント」としての役割をはたすことの、ひとつの表現でもある。

建築を、建築をめぐる関係性に向けて開いていく感性は、鍋島さんだけでなく、馬場さん、山中さんにも共通していた。

「完成としての建築は要らない」

馬場さんのプレゼンテーションの中で、「井の頭の住宅」をめぐる問題はとても興味深いものだった。建築について素人である施主が、金槌とのごりごりを手に取って自ら自宅を改修したいと言いつつ、建築家には一体何ができるのか。外観は、メーカーの建売住宅そのままに、出窓まで可愛らしくついたまま。それは、建築家のアイデンティティを揺さぶられる「接近戦」だったと馬場さんはいふ。「完成品としての建築は要らない」ということばの中に、彼ら若い世代の新たな建築像を垣間見る思いがした。山中さんの「旧南豆製氷所」も、こうした問題に通じるテーマをもったプロジェクトだ。廃屋となった工場跡をどのように再生させていくか。地域を巻き込んで保存に向けた活動やさまざまなアートプログラムがすでに行われている。そうした中で、建築家が果たすべき役割とは何か。「街の温度を上げる」と山中さんが語ったように、それはもはや単体としての建

築ではなく、人びとと建築との関わりをいかに創生していくか、そのプロセスにデザインの比重が移ってきていることを物語るプレゼンテーションだった。

議論を深めるために

このように、それぞれに特徴的な、ユニークなことばで建築が説明されていったのがつよく印象的に残った。建築を関係性の中で考えていくこと、そして作家としての刻印を打つことに懐疑的な姿勢はなかば共通していて、続くディスカッションの場でも話題になった。だが、目線を変え、建築をめぐる同時代の状況について問いかけたとき、彼らの反応はどうだったのだろうか。

最後に会場から寄せられた「デザインプロセスの説明ではなく、建築家としての思想と哲学を聞きたい」という問いに、彼らは少し浮き足立ったかに見えた。先行する世代を横目で睨みながら、そのオルタナティブをどのように見つけ、展開させていくのか。この問いに答えていくためには、作品を説明することだけでなく、そのことばをぶつけ鍛える議論の場が改めて必要になるのではないかと。山中さんになぞらえていけば、ことばの「温度」をどのように上げていけばよいのか。クローゼットパーティ(とそれにつづく二次会)では出展した建築家たちが揃い、興味深い議論が繰り広げられた。

学部や世代の違いを越えた議論の場が、今回の企画がきっかけとなって生まれ、継続されていくことを望みたい。



鍋島千恵

外との関わりや、そのものができたときの町並みを考えています。一個一個が集まって全体になるようなものをつかっていきたいと思っています。それは建物のディテールにも及ぶんですけど、どうしても一個自身がきれいじゃなければいけない。一個がたくさんあるけど、引いてみると全部になるということが、

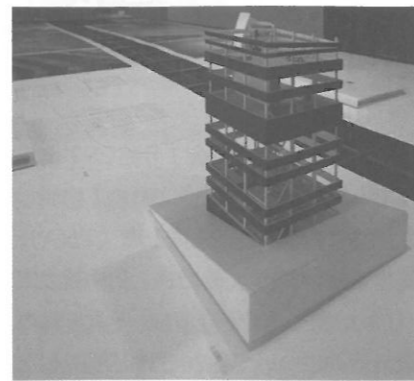


NABESHIMA Chie
1975年生まれ。98年日本大学生産工学部建築工学科居住空間デザインコース卒業(宮脇檀・曾根陽子研究室)。手塚建築研究所を経て、2005年TNAを武井誠と共同設立。

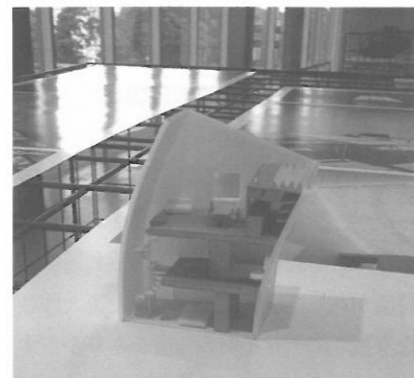
町全体でできたらよいと最近は感じています。

「せっかくつくるのならば、みんなきれいにやっていこうよ」ということを学生には伝えたいです。昔からよく見る夢ですが、自分が街を上から見ていて、建物をひとつずつ「これは汚いからこう変えていこう」と考えているんです。おかしいですね。模型のように、上から何かをしようと考えているんです。

100分の1の模型は、実はすごく正確で、ほんの1ミリ違うだけで実際には10センチも違ってしまふんです。そうすると、印象もガラッと変わってくる。それが顕著に現れます。住宅で考えると100分の1というのは大きいと考えています。引いてみたときにどう見えるのか、環境の中でどう見えるのか、ということを考えるべきだと思っています。100分の1にこだわっているわけではないんですが、気がついたら100分の1でスタディして、100分の1でプレゼンしていますね。



輪の家(2006)



モザイクの家(2007)

黒川泰孝+馬場兼伸

戸建住宅、集合住宅、リノベーションを多くやっています。最近はクライアントが多様化していて、個人ばかりだったのが、地元の不動産屋や小さなデベロッパーの仕事もあります。中国の集合住宅の内装を設計する初の海外プロジェクトも動き出しています。

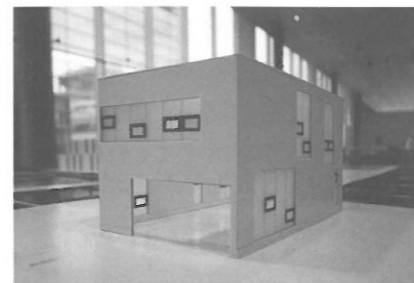


KUROKAWA Yasutaka (左)
1977年生まれ。2001年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了(高宮眞介研究室)。02年メジロスタジオを古澤大輔、馬場兼伸と共同設立。
BABA Kanenobu (右)
1976年生まれ。2001年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了(若色峰郎研究室)。02年メジロスタジオを古澤大輔、黒川泰孝と共同設立。

よくも悪くも3人で事務所をやっているんで、クライアントの種類が豊富です。ひとつの強い作家性を出して構えているわけではないので、依頼される仕事が多様でおもしろい。その状態を維持したまま、どこまで尖がったものができるか、挑戦しがいがあります。

ひとつの組織なので、僕たちと同年代の個人よりは仕事を依頼しやすいのかもしれない。「彼らのところに何か入れれば、何か返ってくるだろう」と。企業やシンクタンクの方が僕たちをそのように買ってくれています。何か相手をわくわくさせるような魅力は維持させていきたいと思っています。

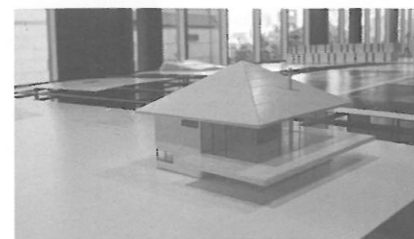
建築の一番おもしろいところは、形によって人の動きが変わったり、環境や人の習性、記憶に影響を与えるようなことです。そのように建築によって二次的に引き起されることだと思います。人が使うものなので、そういった視点を忘れないようにしています。



高松町ガレージ(2004)



熊川の集合住宅(2007)



白州山荘(2004)

多田脩二

学生時代に木造ドームの研究をやりました。今思うと、その頃にやっていたことは相当にレベルが高かったのですが、研究することにおいては甘かったと思います。もっと詰めるところや考えるべきところがいっぱいありました。その時にやっていたことは、社会にでてからの実務設計では、あまりにも特殊すぎてうまく使えていません。研究まで踏み込める



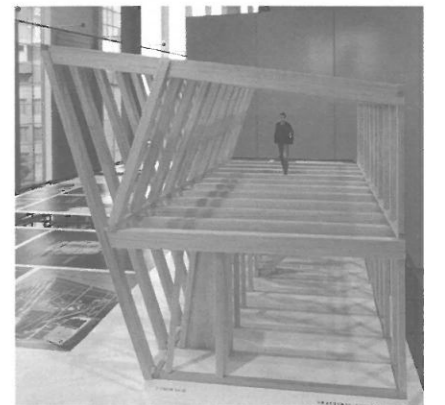
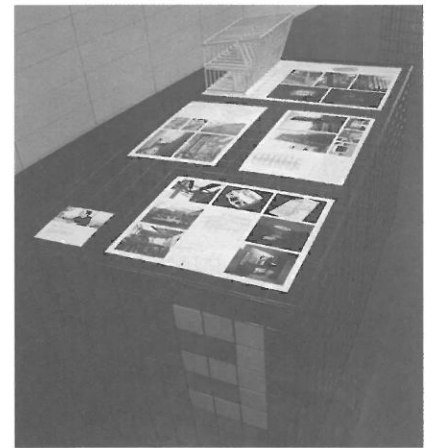
TADA Shuji
1969年生まれ。95年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了(斎藤公男研究室)。佐々木睦朗構造計画研究所を経て、2002年に多田脩二構造設計事務所を設立。

ような実際の建物というのはなかなかありません。

佐々木睦朗さんから影響を受けたことは、建築に対する姿勢です。建築家とどのように建物をつくっていくのか。また、打ち合わせや設計をいかに行き、最後の現場監理に至るまでどのように関わっていくかを学びました。

独立したところは仕事がありませんでした。今も厳しい状況ですが、自分は「あれもこれもできる」といった器用な設計はできませんし、やはり建築家との相性にもよると思います。これからは、住宅から中規模、大規模とステップアップしていきたいと思っています。

何かに興味をもつことが大切だと思います。本や人の話がきっかけとなって先が開けることもあり、楽しくなる可能性もあります。何の意識もなく適当にやっても、何もおもしろいものは生まれません。興味をもってやれば、楽しくなっていくでしょう。



三ツ池の家(2007) 設計/仲亀清進

関本竜太

9割が個人住宅、残りの1割が店舗設計や改装、たまにイベントの会場構成などを手掛けています。イベントでは、フィンランド大使館のお手伝いをさせていただくこともあります。個人住宅は、学



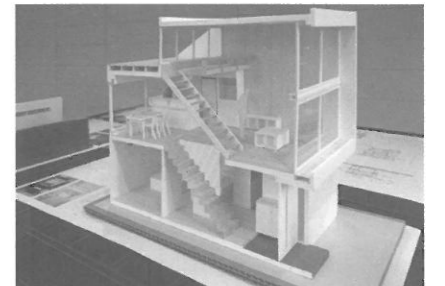
SEKIMOTO Ryota
1971年生まれ。94年日本大学理工学部建築学科卒業(小谷喬之助・本杉省三研究室)。エーディーネットワーク建築研究所、フィンランド・ヘルシンキ工科大学留学、ラブラ設計事務所、グリクセン・ヴォルマラ設計事務所を経て、2002年リオタデザイン設立。08年より日本大学理工学部建築学科非常勤講師。

生の時から住宅の仕事に関わりたいと考えていて、ライフワークとして今後も続けていきたいと思っています。

今後は、住宅の中に置かれる家具や照明の分野にまで踏み込んでいきたいと考えています。すでにメーカーと協働して、素材を含めた開発を進めているところです。まだ試作の段階ですが、来年には発売の目処をつけたいと考えています。

これまでになかった住宅シリーズの開発も進めています。いわゆるハウスメーカーの住宅ではなく、建築家が設計する住宅とも違う、住みやすく誰でも手が届くような価格帯の住宅です。地元工務店と組み、具体的に話を進めています。

設計がやりたいと思って大学に入ったのであれば、学生たちには簡単に諦めてほしくありません。「好きこそもの上手なれ」と言いますが、建築が好きであれば吸収力は自ずと変わってきます。だから好きであり続ける努力を怠ってはいけないと思うんです。



ILMA(2003)



OPENFLAT(2007)



LIGHT BOND(2008)

松崎正寿

就職して学生と違うと特に感じたことは、法律的なこととか、お金に見合ったものをキッチリ求められることです。コンセプトとか、「こういう空間がいい」と言っても、そんなには受け入れられませんでした。法規や予算をクリアした上で提案しなければいけないということを学びました。



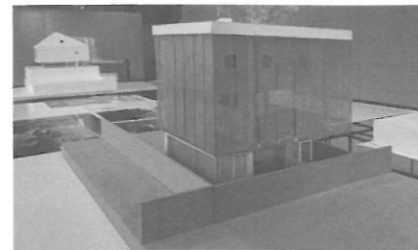
MATSUZAKI Masatoshi

1975年生まれ。2000年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了(高宮真介研究室)。大成建設本社設計本部を経て、02年atelierA5を清水貞博、清水裕子と共同設立。

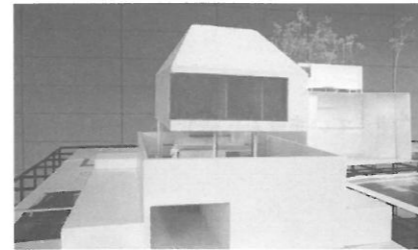
5年間ゼネコンで働きました。新入社員の研修で、現在のパートナーである清水貞博と出会い、一緒にコンペをやりました。その後、友人の住宅を設計し、それを見た人たちから依頼が来るようになったのです。その時は会社と同時並行で、昼間は会社で働き、終わった後に集まって活動していました。その頃の仕事は個人住宅がほとんどでした。

最近はいろいろと雑誌に出るようになって、けっこう、依頼が来るようになってきています。住宅がほとんどですが、オフィスビルや集合住宅もやり始めています。また、5月には展覧会のためにロシアに行きました。

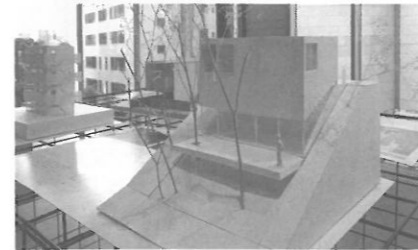
学生の時には、建物のことを考えるとか、形をつくっていくことに一番力を入れてやるのだと思いますが、ディテールのこととか、もっといろいろと細かいことを考えなければなりません。しかし、一番大切なことは、どういう提案ができるかということなんです。



B.house (2005)



KA.house (2006)



IM.house (2007)

大野博史

学生時代に西沢立衛さん、佐藤光彦さん、池田昌弘さん、アラン・バーデンさんのシンポジウムを聞きました。建築の形を説明するひとつの武器として、構造というものがとても大事であり、構造ができていないと建築は説明できないと強く思いました。このように建築はつくられるんだということを、初めてリアリティーのあるものとして感じることができました。

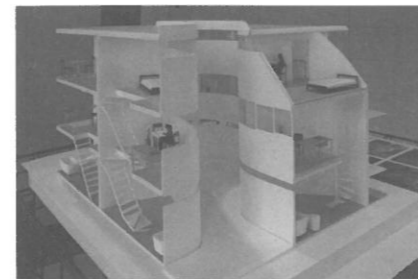


OHNO Hirofumi

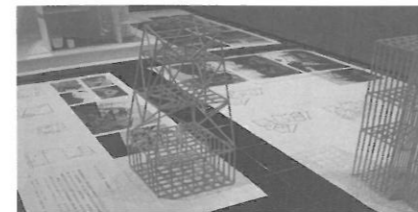
1974年生まれ。2000年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了(若色峰郎研究室)。池田昌弘建築研究所を経て、2005年オーノJAPAN設立。

一緒に仕事をする建築家は、若手から60代の方まで幅広くやっています。やはり住宅が多いですが、集合住宅や公共建築物の構造設計もやっています。独立した時に思ったことと、1年後に思ったこと、今思っていることは全部違うので、そのときどきに正直にありたいと思っています。今は、すごく小さなものとか、すごく大きなものとか、極端なものやりたいですね。

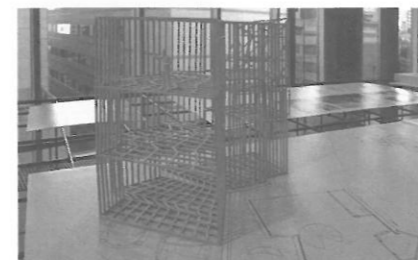
自分で意匠設計をやることは、漠然と学生の頃の思いで考えたりすることもありますが、難しいと思います。スタッフにも意匠設計出身者がいますが、自分で率先してやろうとは思っていませんし、よいものが本当にできるのかどうか分かりません。自分で意匠設計をやったら、できあがる建築に対するスタンスのとり方が、今とは完全に異なるでしょう。そのスタンスのとり方が想像できないですね。そういうことは、やっていくうちに何とかかなるとは思いますが。



NEアパートメント (2008)



キッチンのない家 (2008)



南葉山の別荘 2 (2008)

仲條雪

父(グラフィックデザイナーの仲條正義氏)がデザインをやっていたこともあって、デザインの仕事に就くのは当たり前だと思っていました。その中で何をやるかを考えていて、それがたまたま建築でした。

ワークショップでは、やはり複数で設計を行うよさを感じました。3人(北山恒、木下道郎、谷内田章夫の3氏)とも



NAKAJO Yuki

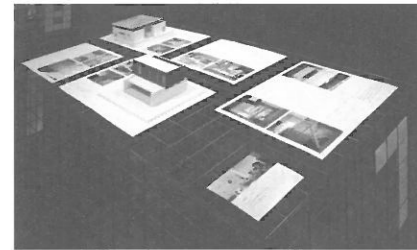
1970年生まれ。94年日本大学理工学部建築学科卒業(若色峰郎研究室)。木下道郎/ワークショップを経て、2002年ジャムズを横関和也と共同設立。

誰かに付いていくようなタイプではなく、はっきりした考えをもっていました。それなのにひとつのものへ研ぎ澄ましていくため、やはり設計の時間も長くなりますが、それでも続けていたのは、ひとりでやるのとは違ったからだだと思います。

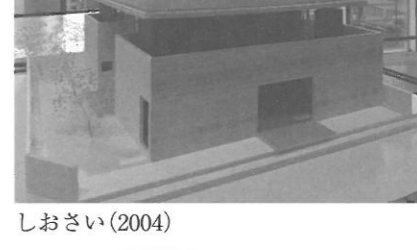
最初の住宅は、仲間と3人で施主に対するコンペをやりました。私の案が通って、それで私が独立したんです。今でもそうなんですけれど、社内コンペをやるんです。施主に向かって2案をだし、反応を見てよさそうな方を選ぶということをやっています。

住宅の仕事が多いのですが、これからは店舗もやりたいですね。たとえば「農業バー」とか、そういうコンセプトチャルな変なもの、コーヒーショップのように街中にいっぱいある。建物が変わっているわけではなく、機能が変わっているものをやったらおもしろいと思います。

「好きならやめない」ということですね。ダメでも生きていけます。



しおさい (2004)



ピアノネロ (2004)

木内厚子

仕事は住宅がほとんどです。大勢の人が使う建物もつくってみたいと思いますが、今のところはまだまだ住宅に興味があります。最近、屋根について、外観だけでなく、それともなう内部空間に興味をもっています。

それとともに、住まうこと、周辺や自然環境を住宅に置き換えるときに、その



KIUCHI Atsuko

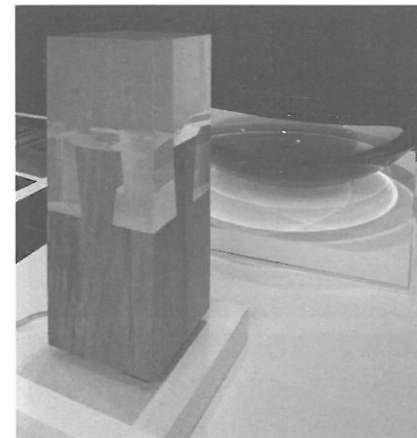
1971年生まれ。94年日本大学理工学部海洋建築工学科卒業(小林美夫研究室)。97年東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修士課程修了。佐藤光彦建築設計事務所、飯田善彦建築工房を経て、2002年Studio 8 設立。08年より日本大学理工学部海洋建築工学科非常勤講師。

「あり方」を深く考えるようになりました。「心地よさ」についても考えています。

プロダクトのデザインも行っています。日本の産業を支えてきた中小工場や伝統工芸の技術が、人件費の安い他国へ受注が流出したり、技術者の高齢化が進んだため、受け継がれずに失われつつあります。そういった技術に対し、デザインの力でなんとか手助けできないかと思っています。

最近はアクリルラウンドボウルが商品化されました。今は屋久杉のテーブルを試作中で、今後は漆器なども手掛ける予定です。建築も多くの素材を使うので、いろんな素材の性質や特質を知ることがいい訓練になっています。

プロダクトは構成要素が少ない分、純粹に表現できると感じることもあります。建築に比べ、多くの人を納得させる必要があるからかもしれません。建築とプロダクト、相乗効果で違った視点をもつきっかけとなっています。



アリツギ(左)アクリルラウンドボウル



O 邸 (2007)

福田創

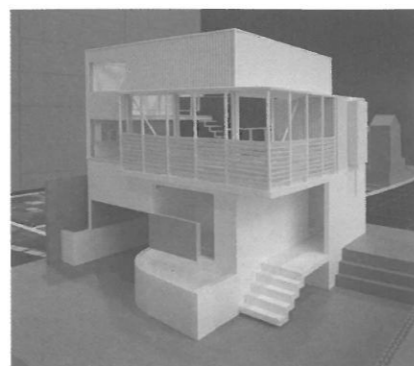
アーキブレーションでは、段取りを考え、工程をおさえ、早目に全部やっておかないと、ものは仕上がってこないということを学びました。建築家によっては、現場を見て、でき上がったものを壊して帰る人がいますが、それは僕にはできません。むしろ、自分たちが現場で遅れたらいけないということを気にしていました。段取りをして、きちんとつくることには自信があります。



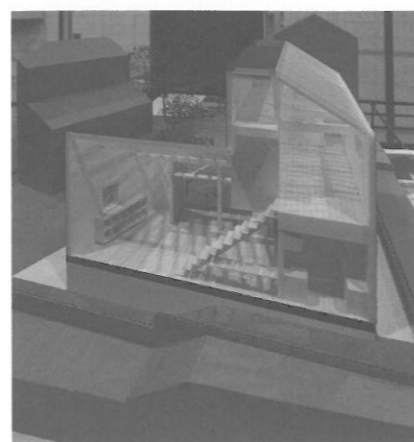
FUKUDA Hajime
1968年生まれ。93年日本大学理工学部建築学科卒業（若色峰郎研究室）。アーキブレーション建築研究所を経て、2001年福田創デザイン事務所設立。

前田光一さんと共同設計を行ったのは、たまたま僕が暇だったときに、「一緒にやらない？」と誘われたためです。2人が異なる案をもち寄り、打ち合わせの中ですべてつくっていききました。どちらかが権限をもつということではなく、お互いが意見を言って決定していききました。どちらかが納得しないで、勝手にものができることはなかったですね。僕も割と細かい方だと思うのですが、前田さんはもっと細かいですね。それを見て、やはりきちんとつくらなくてはいけないと思いました。

基本的に住宅が多いです。仕事きた時に、こういうものができたらよいと勝手に思っていることが当てはまれば、やってみようとしています。うまく反映できていないですね。コンペもやっていきたいので、まずはそういったことができる体制にしないといけないと思っています。その中で、一つひとつきちんとしたものをつくりたいですね。



大口の家(2005)



葉山の家(2007)

齋藤由和

西沢大良さんの「ビルディング」(住宅特集)1997年4月号)という論稿に「建築家に想像力はいらぬ」と書いてあり、それに共感しました。

西沢事務所では想像しないための技術を学習したように思っています。自分の

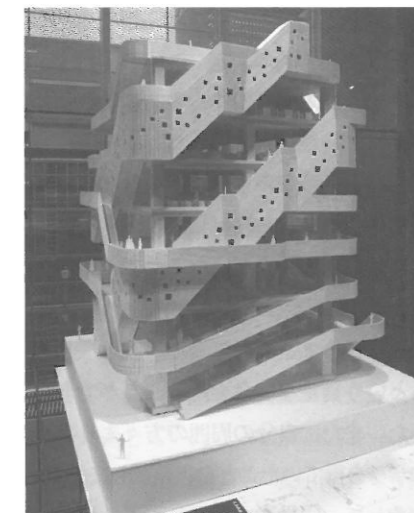


SAITOH Yuwa
1974年生まれ。97年日本大学生産工学部建築工学科卒業(宮脇檀・曾根陽子研究室)。西沢大良建築設計事務所を経て、2003年ア デザイン設立。

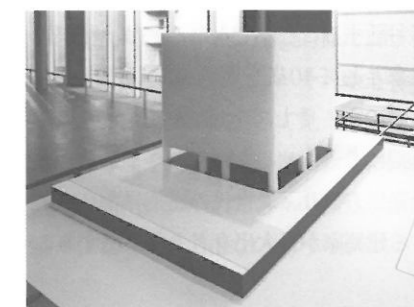
イメージーションが、理性的な判断の邪魔になることが多いからです。噛み砕いて言えば、条件や環境を全部並べて、連立方程式を解いていくとき、「こうしたい」とか「あしたい」ということが先にあると、ねじ曲げた答えをだしていくことになりやすいからです。

そのため、学生の頃よく求められたコンセプトについて、実務の上ではほとんど議論したことがありません。どちらかと言えば、一所懸命思いついたことを捨てていくような作業です。つい過去の何かを参照してしまうので、純粋な回答でない場合は諦めます。それを繰り返してやっと辿り着く感じです。僕は、そのことを純粋な設計と言っていますが、哲学者ジル・ドゥルーズ「差異と反復」の差異に到達するために反復を捨てている、と言ったら正確かもしれません。

クライアントへ客観的に説明し、その設計を共有するためにも、純粋な設計が必要だと感じています。



.730 (point730)



武蔵小杉の集合住宅(2008)

國武陽一郎

大学を決めるときには、周りの人にいろいろと聞いて、日大の建築は社会にでも卒業生にいろんな方がいるので、そういう点がいずれメリットになると思っていました。

長谷川逸子さんの事務所で学んだことは、根気、そして勇気ですね。学生時代にどこまで踏み込むかというのは人それぞれだと思います。しかし、社会人にな

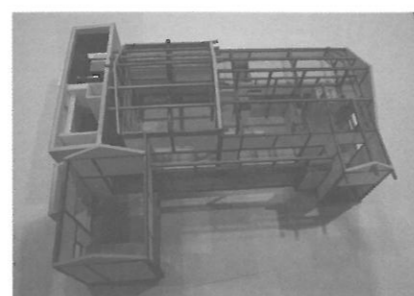


KUNITAKE Yoichiro
1970年生まれ。96年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了(若色峰郎研究室)。長谷川逸子・建築計画工房、山岡嘉弥デザイン事務所を経て、99年one+oneを山田岳と共同設立。

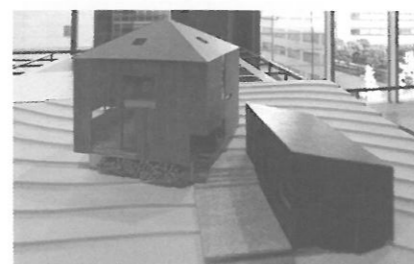
ったばかりの頃は、ある金額で、ある納期までにつくらなければならない中で、自分がどこまで踏み込めるかが分かりませんでした。それを怒鳴られながら学んでいったことは、自分にとって大きいことでした。

自分の中で分からないことがある時に、それを誰かに聞いてもらうことで自分でも納得していくことがあります。そういう話相手を必要としていて、大学に入る前も今も友人の数がとても多く、その人たちに助けられてきたと思っています。ひとりで実力を伸ばせる人もいますが、僕はそういうタイプではありません。自分のやっていることがどうしたことなのか、アドバイスしていただくことで確信がもてることがあります。

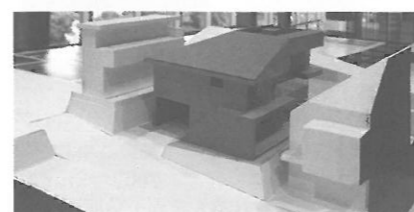
学生の皆さんも、先生方や先輩にどんどん頼ってほしいと思います。自分のことを分かってくれる人を、友人や先輩に限らずに見つけていけばよいのではないのでしょうか。



N 邸(2005)



H 邸(2006)



Y 邸(2006)

山中新太郎

最初の頃は自分ひとりでやっていたので、自分しかないんです。それに対して、事務所という形態は、いろいろな個性を重ね合わせながら進める点が異なります。最近はだんだんとチームでやるようになり、構造や設備のエンジニア、ランドスケープや照明のデザイナーなど、い

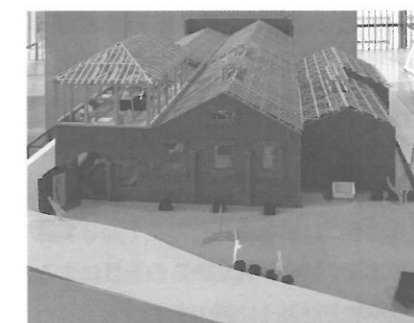


YAMANAKA Shintaro
1968年生まれ。92年日本大学理工学部建築学科卒業(近江栄研究室黒沢隆ゼミ)。2001年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。00年山中新太郎建築設計事務所設立。07年より日本大学理工学部建築学科助教。

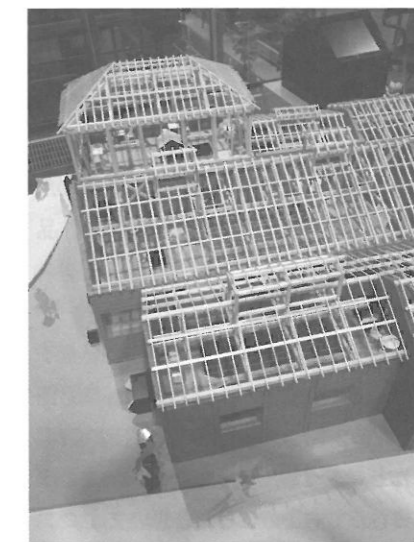
ろいろな人たちと組んでいます。10数年前の自分の仕事と今の仕事を比べてみると、明らかにそこは違うのではないかと思います。今の方が、いろいろなことができそうでおもしろいですね。

昔から、自分が住宅を設計していても、住宅を設計しているという意識がないんです。ビルディングタイプも特にこだわっていません。やはり、都市や街と建築の関係が非常に気になります。単体の建築がどれくらい都市に影響を与えられるのか、逆に影響を受けるのかということに興味があります。

まちづくりにはベタベタな印象があるかもしれませんが、つくりあげていくプロセスも含めておもしろいと思っています。最終的にどのようにユーザーに委ねるかにこだわるのではなく、そこに余地をつくるのがおもしろいと思うんです。どこまで緩く建築や計画をつくれるのか、その緩さのデザインみたいなことをやりたいと思っています。



旧南豆製水所(2005~)



U41@NU展に思うこと

木内厚子(Studio8)

まず、日大出身の多くの活躍される私と同世代の建築家がいらっしやる中、今回の展覧会にお声を掛けていただき、関係者の皆さまにお礼申し上げます。

参加させていただいたことで、卒業してから15年となりますが、改めて大学時代を含めて過ごしてきた時間を振り返るという貴重な機会を得ることができました。また、自分の周囲の方々より多くの学びを得ていたことを再確認しました。

そして、同世代で活躍し頑張られている日大出身の建築家の方々と顔を合わせてお話することができたことは、私が建築家として40歳をどのように迎えたらよいのか、そして10年後の自分の姿を真剣に考えさせるものでありました。また先生方より、次世代の建築界をリードする建築家が日大出身者より輩出するこ

とを、期待されていると感じました。

展覧会を通して、在学生とコミュニケーションをとる機会がなかったことはたいへん残念なことでした。女性の建築家として、特に建築を志す女学生が増える傾向にあると聞きますので、女子学生にとって何らかの思いにつながるものであったら、参加させていただいた意味もあるかと思います。

また、本年度より理工学部海洋建築工学科で、非常勤講師をしておりますので、授業を通しまして、学生と一緒に考えたり、大事に思うことを伝えていきたいと考えています。

経営的工学の一例となれたか？

齋藤由和(アデザイン)

生産工学部から、本展覧会に出品したのは、ほくを含めて2名しかいないことは少し残念である。生産工学部は理工学

部工業経営学科から発展した学部であり、経営に関する必修単位もあって、経営的視点から工学を眺めるという点で、理工学部と差別化されている。

そのことが影響している気もするが、アトリエ事務所勤めた後、デベロッパーに興味をもち、1年間勤めた。事業主という立場で、ファイナンス、不動産、広告宣伝、販売、管理など広範に経験した。不動産の証券化やSPC法によって業界が活性化されたこともあって、独立すると、資産運用や投資目的の建物の依頼が多かった。

その中から、展覧会では、不動産ファンド物件の石垣島の商業ビル「730」とデベロッパー物件の「武蔵小杉の集合住宅」等を出品した。生産性や合理性、事業性に関する条件をすべて受け入れた上で、よりよくなるような設計的提案ができないか検討した。

企画者のコメント

等身大の建築家が見聞できる企画
畔柳昭雄(理工学部海洋建築工学科教授)

建築系を卒業したOBの活躍は、建築雑誌はもちろんでしたが、最近ではファッション雑誌などが建築を取り上げてくれるため、建築がずいぶん身近な存在になり、そこに掲載された作品を通して設計者として紹介されているのを目にする機会が増えたように思います。

こうした専門誌以外で建築を取り上げる雑誌が増えてくれることは、うれしいことであり、おそらく学生にとってはよい刺激になっているはず。そんな雑誌の中でしか見ることができなかった大学の先輩、すなわち若手建築家の作品を身近に垣間見ることができるチャンスが、今回のU41@NUであったと思います。等身大の建築家が考えることをダイレクトに見聞きできるこの企画の開催は、チョットだけ遅かった気もしますが、それでもこうした機会が作られたことは賞賛されてもよいことだと思います。

今後もこの企画が永らく続き、続々と

次代のホープが登場することを期待しながら、学生が少しでも刺激を受けて桜建会に入会してくれることもあわせて期待したいです。

3年ほど前に私の研究室では「建築家の卵たち」と題する講演会シリーズを開催し、山本理顕、伊東豊雄、石山修武、手塚貴晴、長谷川逸子の各事務所から5人の所員に仕事や事務所のお話をうかがいました。その中に、当時、手塚事務所に勤務していた出展者の鍋島さんがいました。その後、独立され「ARCHITECTURAL RECORD」誌の表紙を彼女の作品が飾っているのを拝見した時、懐かしさとともに、見事に卵から孵化されニューリーダーの建築家になられたことに、うれしさを感じました。

U41@NUを登竜門と位置づけて
広田直行(生産工学部建築工学科准教授)

生産工学部からは男性1名、女性1名の2名が出展した。2人も宮脇塾(宮脇研究室を宮脇塾と呼んでいる)の門下

生である。当時、宮脇先生は「卒業して10年すれば結果がでる」と言われていたのを思い出す。齋藤由和君、鍋島千恵さんは奇しくも卒業後10年が今年であった。

由和君の元気のよさは在学当時から群を抜いていた。お行儀は決してよい方とは言えなかったと思うが、建築に対する思いは人一倍で、何でも吸収してやるという姿勢でキラキラしていた。私の記憶に残っている卒業設計のひとつが由和君の作品で、確か「内部空間に使う建具の配置でエレベーションが変化する」という感じの提案だったと思う。Dominique Perraultによるフランス国立図書館を連想させるほどの力作だった覚えがある。チャンスがあれば実作を拝見させていただきたいところである。

鍋島さんは在学当時の記憶はない。今もそうであるが、おしとやかな性格のためであろうか。もう、2・3年ほど前になるが、葉山に設計された「キバリの家」へうかがい、説明していただいたことが

梁型を什器として利用する提案、部屋を広く感じるための提案、容積を多く確保するための提案、スペースを多機能化する提案、誰でも入れる公園のようなピロティーの提案など、地味なことであるが、少しずつ質を高めていくことで、建物はずいぶんよくなることを示せたのではないかと思っている。それらは、直接賃料に反映できない部分もあるが、使い手は恩恵を受けるはずである。

資本主義経済の中で、営利企業が利益を追求することは当然である。建築家にできることは、それを維持しながら、いかにそれらを社会的利益へと昇華できるかであると思っている。

「空っぽの箱」と「道具箱」
山中新太郎(理工学部建築学科)

はじめて佐藤慎也先生からこの企画の話聞いたのは3年ぐらい前だったと思

ある。シンプルできれいな平面計画の住宅だったのを覚えている。バルコニーにつながる大きな開口部と、ひと際主張している薪ストーブには、以前勤務していた手塚貴晴氏の影も見え隠れた。その後、雑誌で発表したいいくつかの作品も力作が多い。一層の活躍を期待したい。

残念なことは、前述の通り2人も宮脇塾出身と言うことである。早いうちに他の計画系の研究室からもU41@NUに出展される卒業生が出てもらいたいところである。

日大建築の卒業生にとって、U41@NUをひとつの登竜門と位置づけて、卒業生の目標とする存在となるよう今後も続けていきたい企画である。

桜門から巣立った建築家たち
大川三雄(理工学部建築学科教授)

会の内容については他の先生方からの確かな論評で寄せられていますので、ここでは企画の背景について触れたいと思います。

う。学部を越えて日大の若い建築系のOBを集めて展覧会をやりたいという発案を聞いて、これはおもしろいことになると思った。その後、本学の専任教員となったために、今回の展覧会やシンポジウムでは大学側と出展者側の両方に身をおいて参加した。

展示では「幸手ハウス」という住宅と、静岡県下田市の「南豆製氷所」という廃工場の改修計画を発表した。ふたつに共通するのは、居住者やまちの人びとという建築のユーザーを意図的に設計に巻き込んでいく方法である。

特に「南豆製氷所」は、確たる未来の姿が描けていない中での計画であり、予測不可能な未来へ向けて、崩壊の危機にある建築をどう守り、どう使っていくかということが課題になった。建物の使い方を決めず、建物の持つ歴史的な魅力を残しながら、未来の使い方に柔軟に対応

できる仕組みが必要であった。

それに対して、建物本体を耐震補強した上で機能を決めない「空っぽの箱」のままに残し、建物の内外にさまざまな機能を支援する仮設的で小規模な建築的な仕掛け＝「道具箱」を設けるという計画である。

こうした問題意識が、今回出展した黒川泰孝さんと馬場兼伸さんが主宰するメジロスタジオの住宅の改装プロジェクトにも共通していたことは興味深かった。同じような類似性は他の展示同士でも見られたのではないだろうか。日本の建築業界は簡単に大きな仕事を若手に任せない。それだけに今回は比較的似たような規模の作品が集まったが、それゆえ各々の共通性や差異が際立って見えていたように思う。そうした関係性の背後に同時代性や同門性、そして各々の個性が浮き彫りになったのではないだろうか。

歴史ある理工系建築学科として、戦前より「構造の日大、デザインの日大」と並び評されてきました。戦後の一時期、吉田鉄郎という建築家を迎え、設計教育に新たな灯が点火されましたが、病のためわずか3年余りの教育に終わってしまいました。その時に直接指導を受けられた小谷喬之助、小林美夫、近江栄といった諸先生方が戦後の設計計画の中核を担い、多くの優れた建築家を輩出してきました。

どのような人材が設計界に育ったのか。その象徴的な出来事が1980年に行なわれた日本建築学会会館の設計競技です。最終段階まで残った2案は、奇しくも早稲田の木島安史さんの案と本学出身で清水建設設計部の秋元和雄さんの案でした。結果は秋元案が1等となり実施に移されました。

翌年、新建築社が企画として『日本の建築家』(1981年12月)の特集を組むことになりました。村松貞次郎、鈴木博之、藤森照信、近江栄といった近代建築史研

究の編者によって明治期から現在までの日本の建築家がリストアップされました。この折の近江先生の尽力により、本学出身の建築家の全容が明らかになったのです。最年少として当時32歳の横河健先生(現・理工学部建築学科教授)の名前も挙げられていました。

このことを契機に「NU建築家の集い」と称し、近江先生を囲む形で交流が続けられてきましたが、先生が逝去された現在、その継続に向けて検討がなされ、何よりも若い人たちにまで輪を広げていくことが当面の課題となっています。今回の展覧会もそうした流れの一環としてとらえることができます。「NU建築家の集い」の特徴は、専門の建築家に限らず、組織に属する人や構道家の方々も含んでいる点にあります。要は「熱いモノづくり魂」をもって建築界で活躍されている日大卒業生の集まりということ。卒業生の幅広い活動を把握し、後輩たちにつなげてゆくことこそが必要であると考えています。

新シリーズ 研究室紹介

連載を始めるにあたって

現在「桜建会報」は、20歳前後から80歳を越えられた方々まできわめて幅広い読者層となっています。そのため、卒業生の皆さまには現在の大学の教員や研究室、また研究内容などをご存じでない方も多いと思われます。一方、現役の学生にとっては所属学科のことは分かっても、100名を越える桜建会の教員（助教以上）の研究の内容などを把握するのはとても難しいでしょう。

そこで、桜建会広報委員会では、少しでも研究室の内容などを知っていただきたいと思い、すべての学科の「研究室紹介」を目指す新企画を立ち上げました。

さらに、この「研究室紹介」によって、卒業生の皆さまの業務や活動をサポートできる研究や技術開発の促進につながるヒント等があれば、それを結び付けようという意図（産学協同）も有しています。

なお、紹介する研究室の数は誌面の関係で毎号変わることもあり、学科や分野はランダムとなる予定です。本号は「隗より始めよ」ということで、僭越ながら、広報委員会委員長および副委員長の「研究室紹介」をいたしました。

今後とも、よろしくご愛読いただければ幸いです。

横内憲久（広報委員会委員長／理工学部海洋建築工学科教授）

研究テーマ ウォーターフロントからの“まちづくり”

水上レストランからウォーターフロント開発の実際の企画・計画立案および水域占有等法制度の対応をコンサルタント

研究室名 ウォーターフロントデザイン研究室（横内・岡田研究室）

教員名 教授・横内憲久／専任講師・岡田智秀

キーワード 都市計画／ウォーターフロント開発／浮体式建築／景観／環境／法制度

企業等への要望 共同・受託研究の要請 実作・試作等の協力 研究成果の事業化等 その他（ ）

研究概要 本研究室は約35年前から、都市の「ウォーターフロント」や「水辺空間」(港湾・海岸・運河・河川・海岸等)を研究対象として、都市の賑わい創出や活性化の促進等のための研究および実践活動を行っています。これまで、ウォーターフロント開発のあり方、景観計画、水域を利用する建築物等の法制度、ミチゲーション制度の導入等を都市計画学会、土木学会、建築学会等で600編を超える論文等として発表しています。また、実践としては、釧路フィッシャーマンズワーフ、大阪港コスモスクエア、横浜港MM地区などの計画等、2006年にはわが国初の浮体式水上レストラン（東京品川・天王洲運河）を完成させました（日本沿岸域学会賞）。ウォーターフロントは混乱した都市空間を秩序立てる空間であるとともに、環境調整を担う貴重な空間資源でもあります。“ウォーターフロントからのまちづくり”は新たな都市・環境づくりのキーワードとなると確信しています。



浮体式水上レストラン（手前ガラス張）

連絡先◎理工学部海洋建築工学科船橋校舎13号館5階 047-469-5427 横内 yokouchi@ocean.cst.nihon-u.ac.jp、岡田 t-okada@ocean.cst.nihon-u.ac.jp

研究テーマ 公共施設オープン化の方法論、コミュニティ施設の計画論、資源循環型社会形成に向けた公的施設の環境形成、大規模災害時の計画的課題

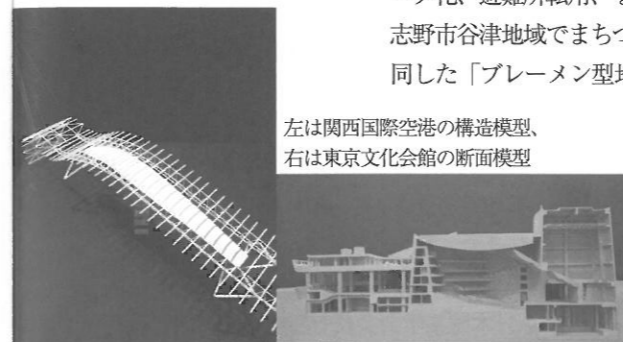
研究室名 広田研究室

教員名 准教授・広田直行

キーワード 建築計画／公共建築／オープン化／ストック活用／ネットワーク化／避難施設

企業等への要望 共同・受託研究の要請 実作・試作等の協力 研究成果の事業化等 その他（ ）

研究概要 本研究室では、施設オープン化に関連する研究として、公共建築を対象に、ストック活用、複合化、ネットワーク化、避難所転用、などについての研究を進めている。研究を応用した実践的活動としては、2005年から習志野市谷津地域でまちづくり活動の手伝いをスタートし、2008年からは千葉県・習志野市・日本建築学会と共同した「プレーメン型地域コミュニティづくり」事業として、まちづくり・住まいづくり支援活動を行っている。



左は関西国際空港の構造模型、
右は東京文化会館の断面模型

さらに、建築界でのイベントとして、2005年～2006年には「生誕100年・前川國男建築展」、2008年には日本建築学会主催「アーキアリング・デザイン展2008」に研究室として参加し、2009年には国立西洋美術館で開催予定の「(仮称) ル・コルビュジェ展」にも参加予定である。また、研究室がバックアップして、所属学生は毎年多くの設計競技に応募している。今年には日本建築学会関東支部入選、ダイワ住宅設計コンペ・優秀賞、三井住空間デザインコンペ・選外佳作、を受賞した。

連絡先◎生産工学部建築工学科5号館313室 tel.047-474-2502 広田 nhirota@cit.nihon-u.ac.jp、HP <http://hirota-lab.arch.cit.nihon-u.ac.jp>

研究テーマ 建築音響に関わる評価・予測・対策手法に関する研究

研究室名 建築音響研究室（井上研究室）

教員名 教授・井上勝夫、助教・富田隆太

キーワード 音環境／騒音・振動制御／固体音／床衝撃音／環境振動／住宅性能表示／居住者反応／民事裁判／転倒時の安全性／歩行感／高齢者／子供の音環境／幼稚園・小学校／都市の熱環境／電磁環境／人間工学

企業等への要望 共同・受託研究の要請 実作・試作等の協力 研究成果の事業化等 その他（ ）

研究概要 本研究室では、建築音響に関するテーマを取り上げ研究しています。中心的なテーマのひとつである「住宅の音環境」については、約35年前から研究を継続し、国内外に350編を超える論文等として成果を公表しています。研究内容ですが、住宅の音環境評価のテーマとしては、実居住者を対象に膨大なアンケート調査を実施し、その問題点を明らかにしています。一方、技術的な研究内容として、建築物の遮音メカニズムや予測計算・性能改善等を扱った物理的研究は、床衝撃音、界壁や外壁の遮音、固体音等、住宅内で問題となるほとんどの要因について行っています。特に、床衝撃音の予測計算法については「インピーダンス法」なる計算法を確立し、日本建築学会の出版物に掲載され、現在幅広く利用されています。最近では、研究テーマを拡張し、都市の熱環境や電磁環境についても研究を行っています。共同・受託研究状況については、毎年数件の研究申込を受けています。



井上教授により開発された床衝撃音測定用ゴムボール (JISにも規定されている)

連絡先◎理工学部建築学科駿河台校舎5号館7階579室 井上inoue@arch.cst.nihon-u.ac.jp 03-3259-0418、富田tomita@arch.cst.nihon-u.ac.jp 03-3259-0463
HP <http://feeling.arch.cst.nihon-u.ac.jp>

事務局だより

就職ステップアップ 支援交流会実施報告

平成14～18年までは個別面談会としていた就職ステップアップ支援交流会を、昨年はホームページでの会員企業の担当者による「桜建相談員」制度を試み

た。今年度からは初めて理工学部校友会建築部会(部長半貫敏夫先生)と合同で、新しい就職状況に対応して交流会をパーティ形式で実施することになり、本年10月3日17時より、理工学部1号館カフェテリアで開催した。学生はプロフィールシートをもって企業ブースを自由に

訪問し、軽食や飲み物を取りながらの熱心な懇談会となった。参加学生数は139名、参加企業は23社に上った。学生への広報方法や実施時期など、今後の課題も残ったが、建築界で活躍する多くのOBを擁する桜建会ならではの交流会として、学内外から好評を博した。

奈良・京都研修旅行報告

本年11月7日(金)より9日(日)まで、秋季研修旅行を実施した。参加者は18名。

初日は奈良平城京や京極殿の復元工事を片桐正夫桜建会会長や奈良文化財研究所の窪寺氏の懇切な説明を受けて見学。8日は長谷寺、室生寺、法隆寺、慈光院など見学し、9日は知恩院の修復工事を担

当する奥谷組の資料館や修復工事の工場などを見学した。他には京都府京都文化博物館(旧日本銀行京都支店)や中京郵便局(旧京都郵便電信局)、町家の紫織庵などを見てまわった。

「桜建ふれあい2008」、 「特別維持会員懇親会」と、 第27回建築講座を同時開催

今年度の特別維持会員懇親会は11月17日(月)、御茶ノ水の東京ガーデンパレ

スにて、第27回建築講座と同時に開催された。懇親会は昨年と同様に「桜建ふれあい2008」と称して、賛助会員企業や個人会員の作品のパネル展示も行った。懇親会は日本大学前総長の小嶋勝衛先生、日本建築学会会長の斎藤公男先生からごあいさつをいただき、110名の会

員の参加により盛大に行われた。また、懇親会前に行われた第27回建築講座は、斎藤公男先生を講師に迎え、「日本建築学会会長として考えていること、やってること」をテーマに、建築学会主催の「アーキエアリング・デザイン展」の内容を中心に講演された。

支部活動報告

桜建彩の会／本年7月31日(木)に「大宮ゴルフコース」で第1回ゴルフコンペを行い、その日の夕方に定期総会兼懇親会を「割烹千代田」で開催。23名が参加し

た。9月5日(金)には、JSCA埼玉との共催で斎藤公男先生の講演会「建築への責任と誇りーアーキエアリング・デザイン2008」を開催しました。(飛坂基夫/幹事)

新入特別維持会員のご紹介

新規入会者 氏名/卒年/勤務先(平成20年7月10日～11月12日 入会順) 6名

吉原清幸 理工建-50 アンクル 水野吉樹 理工建-58 竹中工務店
大橋康博 理工建-50 クリエステート 酒匂教明 理工建-H8 日本大学短期大学部

広井義政 理工建-H5 大成建設
今村雅樹 理工建-52 日本大学理工学部

桜建会事務局

住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。理工学部5号館7階570号室
TEL 03-3259-0649 FAX 03-3259-0709
E-mail kaiin@okenkai.jp
ホームページ <http://www.okenkai.jp/>
専任/庄野弘子
非常勤/関根光枝、大木明子、星野麻衣子
業務時間/AM10:00～PM5:00(月～金)

桜建会報 NO.83 2008-December
発行人 片桐正夫
編集 桜門建築会広報委員会
〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14
日本大学理工学部内

広報委員会
委員長 横内憲久(理工学部海洋建築工学科)
副委員長 広田直行(生産工学部建築工学科)

委員 佐藤慎也(理工学部建築学科)
山本和清(理工学部海洋建築工学科)
塩川博義(生産工学部建築工学科)
野内英治(工学部建築学科)
羽入敏樹(短期大学部建設学科)
西山麻夕美(フリー編集者)
平野香奈子(千葉県庁)
五十嵐賢博(綜建築研究所)

学部ニュース

*詳しい内容の記事をHP (<http://www.okenkai.jp/>) に掲載しましたのでぜひご覧ください

工 トピックス

◎第12回JIA東北建築学生賞の最優秀賞に学部3年生の早川真介君、同奨励賞みやぎ建設総合センター賞に同じく4年生の美濃孝君がそれぞれ入賞した。
◎郡山市内の空き店舗の活用アイデアを募る『みんなでつろう「空いであ店舗」郡山にほしい、こんな店、あんな店』において、優秀賞に建築学専攻2年の鈴木大君、学部3年生の小林真衣君がそれぞれ選出された。

理 工 海洋建築工学科トピックス

◎本学名誉教授の小林美夫先生は、本年11月3日に瑞宝中授章が授与された。

理 工 海洋建築工学科の川西利昌教授、 「紫外線日除けチャート」を携え北欧へ

本年9月、スウェーデン国ストックホルム市公衆衛生局乳幼児衛生担当者から、海洋建築工学科の川西利昌教授の提案している「紫外線日除けチャート」を採用したいので、スウェーデンに適用できるように太陽高度30度、40度版を作成して欲しいと連絡があった。「紫外線日除けチャート」とは天空の紫外線輝度分布を点描した図で、まったくの素人にも紫外線に対する日除けの効果が判定できるものだ。10年にわたる天空紫外線観測と測定値を整理して作成されたチャートで、建築学会論文報告集に掲載し、また諸外国の国際会議で発表してきたもので、海外からの初の要請であった。
11月初旬、川西教授はストックホルム

市を訪問し、公衆衛生部門担当者に「紫外線日除けチャート」の利用法と練習を行った。このグループは来春、米国テキサス州などに行き、紫外線日除けチャートを伝えることになっている。海浜の紫外線被曝が多いことから始めた研究だったが、沿岸域だけでなく、今後紫外線被曝に悩む多くの国に利用されそうだ。



ストックホルム市のスタッフと川西教授(右端)

生産 工 トピックス

生産 工 大内研究室が、大学の研究成果を紹介する事業を ワークショップ形式で実施

大内宏友教授、山田悟史君(大内研究室D3)、大内節子君(同M2)は、日本学術振興会が主催する平成20年度の「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ」事業に採択され、日本学術振興会・日本大学・近隣中学校と共同でワークショップ「webGISによる安全・安心まちづくり地図の作成ー中高生が児童へ伝える自分達のまちー」を11月3日の生産工学部の学部祭と同日に開催した。

今回は、小学校高学年・中学生を対象にワークショップを行った。大学がある「まち」のなかで危険・不安・怖いと感

じた場所とその要因・理由を地図に書き込んでもらい、webGIS上にその情報を作成し公開するという内容である。子どもからみた「まち」について調査するという目的とともに、生活や経験が形として残り次世代に伝わることで、自分と地域のつながりの大切さを感じてもらいたいという願いを込めて企画した。

一般参加者にも助けていただき、小中学生の積極的な参加により少人数ながら多くの貴重な意見を引き出すことができた。参考URL：http://www.oh.arch.cit.nihon-u.ac.jp/hirameki_2008/index.html



webGISに書き込む様子



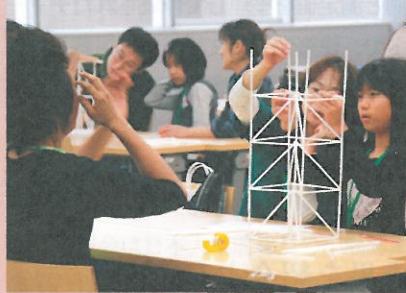
地図に書き込む様子

短大トピックス

上は「ニワをつかむ家」、下は「大きな森と長い動物園」▶

◎吉野泰子短大教授は、全国建築審査会協議会および、船橋市から10年間にわたる建築審査会委員としての建築行政への功績により平成20年度行政功労賞を顕彰された。

◎11月3日、短期大学部オープンカレッジ2008「ものづくり&サイエンス・スクール」が船橋校舎で開催された。各学科コースがものづくりを中心とした体験型プログラムを実施。短大として初めての取り組みであったが、小学生から年配の方まで幅広い年齢層で、約250名の参加者があり盛況だった。建設学科は、「起こし絵」による住宅模型製作、ペーパーストラクチャーとストローハウス、中国伝統民居パオ・ヤオトン体験しよう、暮らし・介護を考える高齢者疑似体験、の4つのプログラムを展開。参加者のアンケートを見ると、すべてのプログラムで楽しみ、体験を通じてものづくりや学問のおもしろさを感じたようである。地域に密着した取り組みは、大学の使命であると改めて感じることができた。



上から、伝統民居パオの体験「起こし絵」による住宅模型製作、「ストローハウス」製作の参加風景

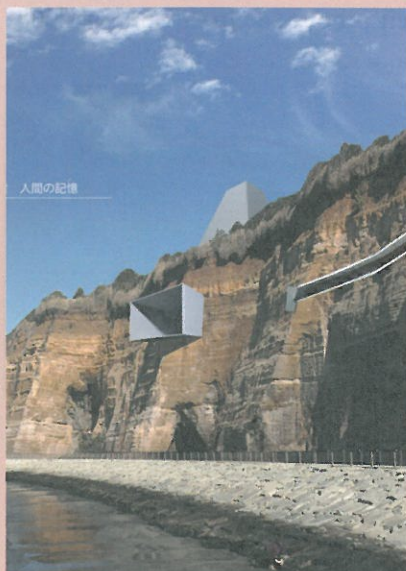
生産 2008年度日本建築学会設計競技で優秀賞を受賞 工 支部でも2グループが入選を果たす

板谷慎君、永田貴祐君（ともに岩田研4年）の作品「時間散歩道」が日本建築学会設計競技関東支部入選の後に全国最終審査に選出され、公開審査によって優秀賞を受賞した。同作品は学部生の優秀作品に贈られるタジマ奨励賞も合わせて受賞。同研究室からの全国入選は、2006年度、2007年度に続き3年連続である。

なお、本年度の応募総数は343作品。また、松本豊君と関川智子君（ともに広田研M2）の作品は、関東支部応募総数71点のうち入賞15点に選ばれ、辻大起君・石川恵悟君・古賀俊郎君・長岡俊介君・皆川和朗君（ともに岩田研M2）のグループ作品「建物のパレード」は関東支部入選を果たした。



上は「時間散歩道」、右は松本豊君と関川智子君の作品のプレゼンテーション



理工 建築学科 トピックス

◎八藤後猛研究室が、日本大学、日本福祉大学、積水ハウスと共同で「第2回キッズデザイン賞」のリサーチ部門賞を受賞した。「乳幼児を対象とした身体および動作計測装置の開発と建築安全計画への考察」による成果が、子どもを対象とした製品開発や安全計画などに貢献すると評価された。

◎佐藤慎也研究室が、11月1～16日に茨城県取手市で開催された「取手アートプロジェクト2008」に、公募アーティストとして選出され、「+1人/日」と題した作品の制作・展示を行った。

◎松岡伸明君（今村研M1）の「ニワをつかむ家」が、「Ishikawa group 2008 住宅設計コンペ」で優秀賞を受賞した。

◎一條真人君（佐藤光彦研M2）、小野志門君（同M1）、中村太一君（同M2）の「大きな森と長い動物園」が、「第3回愛知建築士会学生コンペ」で優秀賞を受賞。

◎岩井友佑君（今村研M1）、柳橋啓一君（佐藤光彦研M1）の「折りガミハウス」が、「第25回JIA東海支部建築設計競技 一般の部」で銅賞を受賞した。

◎櫻田和也君（横河研M2）の「広告×森林公園」が、「第27回総合報道OOH賞2008」で佳作を受賞した。

◎高橋恵多君（横河研M2）の「sculpture」が、「木愛の会 第一回設計競技」で特別賞を受賞した。